12　「物語」　─中古の作り物語

18年度　明治大学

★　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

　　次は『落窪物語』の一節。「女君」を妻としている「（三位の）中将」（男君）に結婚話が持ち上がった、という場面である。これを読んで後の問に答えよ。なお文中の「衛門」は「女君」に幼いときから仕えている侍女、「母北の方」は「中将」の「母北の方」である。

　さるほどに、右大臣にておはしける人の御ひとりむすめ、「１に奉らむと思へど、なからむ世など、①うしろめたなし。この三位の中将、交らひのほどなどにＡ心見るに、もの頼もしげありて、１人のしつべき心あり。これＢあはせむ。２わざとの人のむすめにはあらで、はかばかしき人のもなかなり。年ごろ、かく思ひて、心とどめて見るに、思ふやうなる人なり。だ今なりもて出でなむ」とⅰのたまひて、知りたる②ありて、男君の御乳母のもとに、かうかうなむⓐ思ふ、と言はせたまへれば、御乳母、「かくなむⅱはべる。いと③やむごとなく、よきことにこそはべなれ」と言へば、中将、「３ひとりはべるほどならましかば、いとかしこき仰せならましを。今はかくて通ふ所あるやうに、ほのめかしたまへ」とて立ちたまひぬれば、御乳母の思ふやう、この御妻は父母もなきやうにて、ただ君にのみこそかかりたまひためれ、はなやかに④かしづかれたまへらば、よからむかし、と思ひて、君ののたまふやうには言はで、「いとうれしきことなり。今２よき日して御文も取りてＣ奉らむ」と言ひやりたりければ、ａこの殿には、よしと思して、急ぎてとⓑ言はば、四月にも４取らむ、とⅲ思して、御、あるよりもいかめしうし変へて、き人Ｄ求め、＊したまふ。

　「君は右大臣殿の婿になりたまふべかＸなり。ｂこの殿に知りたまへりや」と言へば、衛門、５あさましと思ひて、「まださるけしきも聞こえず。たしかなることか」とⓒ言へば、「まことに。この四月とて急ぎたまふものを」と告ぐる人ありければ、女君に、「かうかうこそⅳはべるなれ。さは知ろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらむと、あさましくⓓ思ひながら、「まださることものたまはず。誰が言ふぞ」とのたまへば、「ｃかの殿なる人の、たしかに知る便ありて、３月をさへ定めて申しはべる」と言へば、心のうちには、この母北の方、ひてのたまふＹにやあらむ、さやうなる人のおしたててⅴのたまはば、６聞かではあらじ、と人知れず思して、心づきＺぬれど、⑤つれなくて、のたまひやするとⓔ待てど、４かけても言ひ出でたまはず。

注

　＊ただ今なりもて出でなむ……今すぐにも出世するだろう、の意。

　＊若き人……ここは「女房・侍女」のこと。

　＊経営……忙しく奔走すること。

問１　傍線１について、「内裏に奉る」の意味するところとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　参内　　Ｂ　伺候　　Ｃ　入内　　Ｄ　宮仕え

問２　傍線２「わざとの人のむすめにはあらで、はかばかしき人の妻もなかなり」を現代語にしたものとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　今いる妻はさしたる家柄の女性でもなく、あの人にはちゃんとした妻もないとのこと。

Ｂ　今の妻は是非にと望んだ女性でもなく、あの方には気に入った妻もいないのであろう。

Ｃ　しっかりした家柄の娘でなければ、きちんとした人にとっては妻はいないも同然である。

Ｄ　世間では、身分の高い親を持つ女性以外は、ちゃんとした人の妻にはなれないと言う。

問３　傍線３「ひとりはべるほどならましかば、いとかしこき仰せならましを。今はかくて通ふ所あるやうに、ほのめかしたまへ」の部分についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　申し出が受けられない事情のあることを残念に思っている。

Ｂ　申し出に困惑して、受諾できない理由をこしらえようとしている。

Ｃ　申し出を受けることが出来るように取り繕おうとしている。

Ｄ　申し出に応じられない理由を挙げて、断ろうとしている。

問４　二重傍線ａｂｃの「殿」はそれぞれ誰を指すか。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　ａ　右大臣方　　ｂ　右大臣方　　ｃ女君方

Ｂ　ａ　右大臣方　　ｂ　女君方　　　ｃ右大臣方

Ｃ　ａ　女君方　　　ｂ　女君方　　　ｃ右大臣方

Ｄ　ａ　右大臣方　　ｂ　女君方　　　ｃ女君方

問５　傍線４の「取る」と内容的に同じ意味となる語句を本文中に波線を施したＡ～Ｄの中から一つ選べ。

Ａ　心見る　　Ｂ　あはせ　　Ｃ　奉ら　　Ｄ　求め

問６　傍線５「あさまし」にはどのような気持ちが込められているか、次の中から最も適切なものを一つ選べ。

Ａ　もたらされた情報に驚き、その事態が招来する深刻さにおののく気持ち

Ｂ　もたらされた情報に驚き、それを予測できなかった自分の浅慮を恥じる気持ち

Ｃ　もたらされた情報に込められた狡猾な思惑を察知し、非難する気持ち

Ｄ　もたらされた情報に込められた浅薄な思惑を非難し、侮蔑する気持ち

問７　傍線６「聞かではあらじ」の現代語訳として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

Ａ　従わぬ訳でもあるまい

Ｂ　承知しない訳にはいくまい

Ｃ　了解させずにおくものか

Ｄ　私の耳にも届いたに違いない

◎問８　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

Ａ　突然持ち上がった縁談話に、当の中将は自らの出世の重要な足掛かりと思うが、現在の妻のことを思うと決断しがたく思っている。

Ｂ　突然持ち上がった縁談話に、中将の御乳母は、今いる中将の妻にとっても華やかに厚遇される良い機会と判断して、歓迎している。

Ｃ　突然持ち上がった縁談話に、女君に親しく仕える衛門は、その背景にある卑劣でさもしい魂胆を見抜いて、嘆かわしく思っている。

Ｄ　突然持ち上がった縁談話に、中将の今の妻の女君は動揺するが、努めて平静を装って、中将からの説明が示されるのを待っている。

【確認問題】

１　傍線部①～⑤の本文中の意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

①　うしろめたなし

　ア　やましい　　イ　無情だ

　ウ　心配だ　　　エ　後ろめたい

②　便

　ア　手紙　　イ　つて

　ウ　手段　　エ　取り合わせ

③　やむごとなく

　ア　格別で　　　　イ　よくわからず

　ウ　やむをえず　　エ　思いがけなく

④　かしづかれ

　ア　補佐され　　　イ　大切に育てられ

　ウ　飾りつけられ　エ　厚遇され

⑤　つれなく

　ア　よそよそしくし

　イ　気づかないふりをし

　ウ　恨めしく

　エ　ものさびしく

２　波線部ⅰ～ⅴの敬語は誰に対する敬意か。適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　女君　　　　イ　中将　　　ウ　衛門

エ　母北の方　　オ　右大臣

ⅰ［　　　］　ⅱ［　　　］　ⅲ［　　　］

ⅳ［　　　］　ⅴ［　　　］

３　点線部Ｘ～Ｚの助動詞の文法的意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　完了　　イ　強意　　ウ　伝聞

エ　断定　　オ　存在

Ｘ［　　　］　Ｙ［　　　］　Ｚ［　　　］

【補充問題】

４　二重傍線部ⓐ～ⓔの主語として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　女君　　　　イ　中将　　　ウ　衛門

エ　母北の方　　オ　右大臣

ⓐ［　　　］　ⓑ［　　　］　ⓒ［　　　］

ⓓ［　　　］　ⓔ［　　　］

５　二重波線部１とは、具体的にはどのようなことか。適当なものを次から選べ。

ア　老後の面倒

イ　結婚した女性の世話

ウ　天皇からの後ろ盾

エ　上司への忠誠

６　二重波線部２とは、何について「よき日」と言っているのか。漢字二字で答えよ。

（　　　）

７　二重波線部３とあるが、何月と決めているのか。

（　　）月

８　二重波線部４とは、⑴誰が・⑵どのようなことを言い出さないのか。

⑴（　　　　　）が

⑵（　　　　　　　　　　　　　　　　）こと。

【解答】

問１　Ｃ

問２　Ａ

問３　Ｄ

問４　Ｂ

問５　Ｂ

問６　Ａ

問７　Ｂ

問８　Ｄ

【確認問題】

１　①＝ウ　②＝イ　③＝ア　④＝エ　⑤＝イ

２　ⅰ＝オ　ⅱ＝イ　ⅲ＝オ　ⅳ＝ア　ⅴ＝エ

３　Ｘ＝ウ　Ｙ＝エ　Ｚ＝ア

【補充問題】

４　ⓐ＝オ　ⓑ＝イ　ⓒ＝ウ　ⓓ＝ア　ⓔ＝ア

５　イ

６　結婚

７　四（月）

８　⑴＝中将（が）　⑵＝右大臣家の婿になる（こと。）

【現代語訳】

　そうこうしているうちに、右大臣でいらっしゃった方の御一人娘（がいて）、「天皇に差し上げようと思うが、自分が死んだ後のことなど、心配だ。この三位の中将は、交際している間などに様子を見ると、信頼できそうで、女性の世話をきっとしそうな思いやりがある。彼を（娘と）結婚させよう。（今いる妻は）さしたる家柄の女性でもなく、あの人にはちゃんとした妻もないとのこと。数年来、このように思って、注意して見ると、思いどおりの人物だ。きっと今すぐにでも出世するだろう」と（右大臣は）おっしゃって、知っているつてがあって、中将の御乳母のところへ、こうこう思う、と言わせなさったので、御乳母は、「このようでございます。とても格別で、喜ばしいことであるようです」と言うと、中将は、「独り身でおりますときであったら、たいそうもったいないお言葉だっただろうに。今はこうして通う所があるというように、それとなくお伝えください」と言ってお立ちになったので、御乳母が思うには、今の奥様は父母もない様子で、ただ中将様にだけ頼っていらっしゃるようだが、（中将様が右大臣様に）格別に厚遇されなさったとしたら、喜ばしいだろうよ、と思って、中将がおっしゃるようには言わないで、（右大臣に）「とてもありがたいことだ。早速吉日を選んでお手紙も書いて差し上げよう」と言って（人を）遣ったので、右大臣は、（中将が）承諾したとお思いになって、（中将が）早く（結婚したい）と言うなら、四月にでも（婿として）取ろう、とお思いになって、お手回りの諸道具を、以前からあるものよりも盛大に新調して、女房・侍女を探し求めて、忙しく奔走しなさる。

　「中将様は右大臣殿の婿におなりになるようだ。こちらの奥様は承知なさっているのか」と（ある人が）言うので、衛門は、驚きあきれたことだと思って、「まだそんな様子も伝わってこない。確かなことか」と言うと、「本当に。この四月（に結婚式を行う）と言って準備なさるのに」と告げる人がいたので、（衛門が）女君に、「こうこうであるようです。（あなたは）そうだとご存じだったのか」と申し上げると、（女君は）本当であろうかと、意外に思いながら、「まだ（中将は）そのようなこともおっしゃらない。誰が言うのか」とおっしゃるので、（衛門は）「あちらの右大臣邸にいる人で、（内情を）確かに知っているつてがあって、（結婚式の）月までも決めて申しています」と言うと、（女君は）心中では、中将の母北の方が、無理に（結婚せよと）おっしゃるのであろうか、そのような人が無理強いしておっしゃるなら、（中将も）承知しない訳にはいくまい、と人知れずお思いになって、（中将に持ち上がった縁談に）気がついたけれども、気づかないふりをして、（中将が自分に直接）おっしゃるかと待つが、（中将は）まったく言い出しなさらない。